

「中国の人々と交流して感じたこと」 浅野美咲

私は大学入学後中国語専攻として勉強していましたが、それまでは全く海外に行ったことがなく、今回様々な方の助けを借りながら初めて海外へ行きました。なので私にとってはとても貴重な五日間となったし、前から中国大陸が台湾に行きたいと思っていたので、今回それが実現して本当に嬉しかったです。

私は普段、大学で留学生と交流するのですが、中国の方は、日本の方よりはっきり態度に表すような感じを時々受けます。もちろん全ての人がそうであるわけではないですが、今まで交流があったにも関わらず急に好意的でない態度をとられたことが何度かあり、そのような留学生に対しては積極的に話しかけるのをやめてしまったし、壁を感じてしまいました。日本人は相手に対して思っていることを表に出さない文化があるので、そのような文化の違いかなと感じました。

しかし、今回このような機会をいただけたので、中国語しか聞こえない環境を存分に使って、積極的に話しかけていくこと、そして中国を実際に肌で感じ、文化を体験することを目標にしました。まず、一つ目の目標である、「積極的に話しかけること」ですが、私は中国で様々なひとと話したり、助けられたりしました。飛行機に乗ってすぐに、CAさんとコミュニケーションを必然的にとらなければなりません。私は飛行機に乗るのも初めてだったので、何を聞かれているかもよくわかりませんでした。隣に座っていた同じ班の子が、「飲み物に氷を入れるかどうか聞いてるよ」と教えてくれて、ようやく意味がわかりました。Spriteを中国語で何というのかCAさんに聞いてみたら、「雪碧”だと教えてくれました。このCAさんが私が最初に国外でお話した中国人でした。飛行機を降りてからも、空港でCAさんたちが”Did you enjoy Beijing?”と話しかけてくれました。ホテルに着いてからすぐに寝たかったのですが、私とルームメイトはルームキーのカードの不具合で中に入れませんでした。何故かこの後も私たちの部屋ではこのようなことが時々起こり、その度にフロントまで行かなければなりません。ですがフロントで説明するのが中国語の練習にもなりよかったです。また、ドアの開け方が分からず困っていると、見 + 知らぬ中国人男性がジュースチャーで教えてくれ、とても温かい気持ちになりました。また、ホテルでケーキを友達と買うときも、わからない単語が出てきて、翻訳アプリを使って店員さんに打ってもらって理解しました。日本語がわからない相手とどうにかしてコミュニケーションを取るというのも私には初めての経験だったので新鮮でした。天壇公園に行ったときは、自分から声をかけて、中国人の男性に友達との記念写真を撮ってもらいました。また、北京城市大学では、活動をする間に、“电头”や“打火机”など中国語を覚えたり、一人の生徒と仲良くなり、wechatを交換しました。活動中も、その後のwechatでのやりとりでも、とても優しくしてくれました。

そして二つ目の目標である「中国を実際に肌で感じ、体験すること」では、日本との違いを感じました。まず、交通量がとても多く、ホテルの前の大通りを渡るのさえ危険に感じました。中国では車が待ってくれないので、タイミングよく渡らないと本当に危険だと思いました。さらに、トイレに関しては日本で育った私にはとても不便に感じました。日本の下水処理の技術が世界的に高いという話をあとで聞いて、技術が世界に広がってほしいと思いました。また、万里の長城が、もっとゴミなどが多いと思ったのですが、全く落ちていなくてきれいでした。逆に、私は万里の長城そのものの大変さに驚きました。観光地だと思って登ったら、まるで登山をするように登るのが大変でした。

今回の訪中で、自分から声をかけたりしながら交流することで自信がついたと同時に、もっと中国語を話せるようになりたいと思いました。今まで留学生としか関わりがなかったのですが、今回中国の方々の親切さに触れ、もっと中国に足を運んで中国の人と話してみたいと思うようになりました。日本には日本語を一生懸命勉強して日本に来る中国の方がたくさんいます。私も彼らを見習いたいし、私はまだ中国の文化について知らないことがたくさんあると思うので、もっと文化を理解し、中国と日本の国民間でさらに良い関係を築いていきたいと思います。

「日本人と中国人、同じように生きている」 石水 未奈

わたしは大学生訪中団として北京を訪れる前に、4回ほど中国を訪れたことがある。いずれの旅行でも、数多くの中国人と関わったがとても良い印象だった。訪中前の中国人への印象はとても良かったため、今回の訪中で大きく気持ち、考えが変化したとは言えないが良い印象というのは変わらない。この5日間で、1番関わった中国人はガイドさんだ。仕事なので当たり前と思うが、本当に優しく話しかけた。わたしの父に少し似ていたからかもしれないが、とても親しみやすく、建物の説明なども簡潔にわかりやすく教えてくれた。1日目の大学訪問の際、わたしは「中国結び」を作った。その時に関わった学生もみんな優しく教えてくれた。一般的に、中国人は話し声が大きくて怖いなどの印象を抱かれることが多いが、実際に関わってみると確かに声は大きいけど怒っているわけではなく、言語の特性であることがわかる。このようなことも実際に中国人と関わり、中国語を学んでみないとわからない。1日目の夜、食事の際各テーブルに中国人の学生が配置され、運良く隣に座れたわたしは学生としっかり話す機会があった。そこで話していて感じたのは、日本で暮らしている大学生も、中国で暮らしている大学生も同じ大学生なのだということだ。休みの日はアニメを見たり、友達と出かけたりする。趣味はゲームで夜いつもやっているなど、日本の大学生と同じだ。中国の学生は勉強ばかりというイメージだったが、平日の様子を聞いたところ、学校の授業を受けて、その後は自由に過ごしているよと言っていた。テスト期間などは、図書館にみっちり籠って勉強するようなので、あながち間違いではないのだろう。しかし、日本で得る情報は必ずしも正しいわけではないと感じた。本当のことは、自分で見てみなければわからない。中国の場合、日本のメディアが良

いニュースをあまり報じないため、中国のことを誤解している日本人も多いと思う。良いことはばかりだとは言えないが、それは日本も同じだ。今回、大学生と話してみても日本人と中国人は同じ人間であると更に感じた。自分が伝えられる範囲で、本当の中国人の様子を伝えていきたい。

さて、これからどう中国関わっていくかについてだが、簡潔にいうと今回の訪中を通して、これからも中国と関わっていききたいという思いが強くなった。訪中前から、留学を考えていたり、交流会に参加したりなど中国と関わっていないわけではなかった。しかし、同年代で中国語を学んでいた、留学していた、中国が好きだったり自分の意思で中国に関わっている日本人としっかり交流するのが初めてだった。わたしにとって、北京で過ごし中国人と関わる時間はとても有意義だった。もう一つ記憶に残っていることがある。それは、一緒に行った大学生と中国について、留学について、日中友好協会についてなど話せたことだ。これからも日中友好協会と一緒に活動出来るのが楽しみだ。この5日間で、中国への想いが一層強くなったと感じており、わたしの人生において今回の大学生訪中団に参加したことは、2019年最も充実した5日間であったと言える。この機会をこれからどう活かしていくかが重要である。先ほども述べたとおり、自分が伝えられる範囲で、本当の中国人の様子を伝えていきたい。家族や友達には再三中国の話をしていて、良いイメージを持ってきている。ほかのコミュニティでも、中国へ良いイメージを持つ人が増えるようどんどん伝えたい。日中友好協会でももっと積極的に活動することで、中国に関わる機会を増やしていきたい。本当に参加してよかったと思う。

「訪中して初めて見えた中国の姿」 伊藤友紀

今回の訪中団に参加して、私の中国のイメージは大きく変化した。訪中団に参加する前の中国のイメージは、あまり良いものではなかった。テレビやネットに流れる中国の情報をまとめると、「中国は周辺の国々や環境問題を考えず、ただ自国の発展を求めている一方で、国内には大きな経済格差がある。中国人は声が大きく自分中心に行動し、マナーが悪い」といったマイナスイメージがある。政治的な話題では領土問題、市民レベルでは道路が汚い、列に並ばないなど、様々なネガティブキャンペーンが展開されているのが中国に対する日本の報道姿勢だろう。そして、自分もそのような視点で中国という国を考えていた。

ところが、実際に中国の土地を自分で見て少しばかりながら中国人を身近に見てみると、中国に対するネガティブなイメージと、現実とのギャップを知るようになった。例えば、日本では中国がいかに反日運動を繰り返して日本が嫌いかということがしばしば報道される。だが、中国で見た大学生たちは嫌日感情を持ち合わせていないどころか、歓迎会でヲタ芸や某有名アイドルの踊りを披露してくれたり、実際の日本を知らなければできないことを披露していた。もちろん、日本語を学び日中友好行事に参加する学生が中国人のすべてというわけではないが、日本人と同じかそれよりも日本の文化を愛する中国人大学生の様子を見て私は衝撃を受けた。

また、日中友好交流大会を中国の国会である人民大会堂で行われたことも印象的で、自分の中で日本と中国の関係を考えるきっかけとなった。この交流会は、いつもは大学などで行われるが、今回人民大会堂で行われたのは、その直後に同じ会場で行われた安倍総理と習近平主席との会談があったからとも後で知り、中国側が日本と積極的に友好関係を構築しようとしているのが分かり、反日だけではなく中国を知ることができた。日本と中国は隣同士にあり交流の歴史も長い、歴史を顧みても現在の状況を考えても、両国が仲良くしていた期間はとても短いという事実を考えると、自分たち一人ひとりがこうして実際の姿を自分の目で見て、自分なりの考えを持つのが大切なのだと実感した。また、国籍や住む土地によって悪い人や良い人が分かれるのではなく、どんなところにも良い人がいれば悪い人もいるという単純な事実を再発見するきっかけにもなった。

滞在中は主にバスで移動したが、バスの窓からみる中国は一言でいうと「カオス」だった。というのは、経済発展した北京には日本ではまず見ないような変わった形のビルなどの建築物がたくさん見られ、中心部と思われる通りには欧米の高級ブランドの店があり、繁栄している様子がかがわれた。その一方で、高級ブランド店の二〜三十メートル前の道路を大きな台車にたくさんの荷物を載せて引いているおじさんがいたり、バスを待つまでに物売りのおばあさんやおじさんが寄ってきて簡単なおもちゃを売ろうとしてくるのを見て、中国国内の経済格差を目の当たりにした。

帰国後に一番大きかった自分の変化は、中国語を学び始めたことだ。中国滞在中は日本語と英語を使っており不自由はしなかったが、中国人と中国語で話す同じ日本からの団員をみて憧れを抱き、自分も中国語で話してみたいと思う大きなきっかけとなった。やはり中国を知るうえで中国語ができたほうが便利だし、なにより楽しいと思う。団体行動だったのもあると思うが中国滞在中は大概英語が通じ、不自由することはなかったが、町に歩くと、露店のおじさんや町行く人は中国語しか話さないため、グーグル翻訳が使えない中国において少しでも中国語を話せることは大きなアドバンテージになると感じた。現在の目標は、旅行レベルで困らないレベルの中国語をマスターして、また中国を訪れることだ。訪中団に参加しなければ、私はこの先もずっとメディアに引張られた歪んだ目線で中国を見て、特段訪中したいとも思わなかっただろう。今回運よく訪中団に参加できて、心から感謝している。

「訪中がもたらした価値観の変化」 大高 一輝

3日間の訪中を終えて感じたことは、中国という国家の歴史の深さと、その中で培われた文化の力強さである。私はこれまでの人生において、メディアの影響や自分が見聞きしたこと、体験したことにより、中国や、そこに住む人々に対して偏見を持ってしまっていた。しかし、それは文化の多様性を認めないことと同義であると、現地学生との交流や北京各地を周るなかで気づくことができた。日中友好協会の大学生訪中団の一員となったことにより、いかにして自分の価値観が変わっていったのか、以下に述べていきたい。

まず、天安門広場や故宮、万里の長城、人民大会堂などの中国の歴史的建造物を巡り、中国の歴史の深さを強く感じた。故宮博物館では、豪華絢爛なかつての宮廷の暮らしを垣間見て、日本にも大きな影響を与えたであろう、古代中国の歴史の華々しさを感じることができた。万里の長城は数千年の時を経てなお力強く残っており、数々の砦から見える、連なる山々の景色も含め、中国の雄大で力強い自然に感動を覚えた。また、周囲の山々では植林活動が盛んに行われており、建造物だけでなくその周囲の自然と景観をも守ろうとする意識に感銘を受けた。

また、天安門広場は、数万人を収容できるという想像を絶するスケールの広さに感動した。国家を変革するという情熱を持った人々が懸命に活動を行った場に立ったことによって、改めて人々の力強さ、近現代中国史の深さと重みを感じることができた。

ここまで挙げた名所を含め、他の観光地も全て安全面・衛生面ともに想像よりもはるかに整備されており、中国が自国の歴史・文化を自国民のみならず外国人とも積極的に伝達・共有しようとしている姿勢が感じられ、自分の中の中国に対する閉鎖的なイメージが払拭されることとなった。

次に、現地大学における交流会、千人交流大会や各地で戴いた多様な料理を通じて、中国文化の力強さを感じた。交流会では、伝統工芸品を作成するにあたり、現地学生が日本語や英語で拙くともなんとかコミュニケーションを取ろうとしてくれる姿勢に感銘を受けた。また、交流大会ではジブリ作品の楽曲演奏や中国伝統舞踊、少林寺拳法の素晴らしいパフォーマンスを千人の大学生とともに目の当たりにし、長年伝えられ続けてきた文化の力強さと、それらと混ざり合う日本の文化に感動するとともに誇りを持つことができた。

また、食事では似ているようで実際に食べてみると風味や味の全く違う、多種多様な中国料理を各地で戴き、その奥深さを毎食感じる事ができた。さらに、毎度食べきれないほどの量が盛り付けられていて、中国の人々のおもてなしの精神を感じた。円卓に並んだ大皿料理を大勢で囲んで食べるというその食事のスタイルから、友人や家族との食事のひと時を大切にするという中国人の文化的特色をみられたように思った。

そしてなによりも、訪中団の学生たちと三日間をともにし、中国に対して友好の気持ちや憧れをもつ同世代が自分の想像をはるかに上回るほどに大勢いるということに頼もしさを感じた。若者の企業施設で真剣に話を聞き、質問する仲間たちの姿を見て、もはや中国にたいして偏見を持っている場合ではなく、認め、学び、協力・共存する姿勢をもたなければならないという使命感を持った。

中国と、そこに暮らす人々のもつ歴史の奥深さ、根付いた文化の力強さを認め、相入れない部分も含めて共存共栄の道を探っていかなければならないと感じた。これからは、今まで看過してきた中国との交流や問題に目を向け、当事者意識を持って生活していきたい。

「百聞は一見にしかず」 金森陽菜

私は中国で生まれ育ち、10歳の年に日本に移住し、帰化して日本人として生活してきました。昨年ごろから凄まじい速さで変化し続けている中国のことをもっと知りたい、もっと関わりたいという思いから、様々な日中関係のイベントを探し、積極的に参加してきました。今回は知り合いの先生からの紹介で訪中団のことを知り、参加する機会を頂けてとても嬉しく思います。今回の訪中団で最も強く思ったことはタイトルにもある通り、「百聞は一見にしかず」です。現代は様々な媒体が発達して多くの情報を簡単に得ることができるが、その一方でそれらの間接的な情報を鵜呑みにして、意見に影響されて流されてしまうことが多くあります。例えば、ニュースでよく取り扱われる中国のPM2.5問題に関してですが、私もそのことを日本のニュースで深刻に報道されているのをよく耳にして、北京に行けばマスクなしでは出歩けない程のイメージを抱いていたが、実際に訪れると想像していたのとは異なって、街も道路もかなり清潔でした。媒体を通して伝えられる情報は、どうしても多少誇張されたり、制作者の意思が入り込んでしまったり、全てが事実通りに伝わるのが難しいです。中国は日本の隣国にも関わらず、訪れる日本人が身の回りにほとんどいないのは、こうした背景が原因の一部となっていると考えます。

私は今年でちょうど中国と日本両方の国で10年ずつ生活してきて、どちらの国の文化や習慣についても慣れていて、ほとんど先入観なく見ることができそうですが、実際現在の社会において、日本人も中国人も互いに多かれ少なかれ偏見を持っているように感じます。それは個人の問題ではなく、例えば、歴史的出来事について両国それぞれ異なった解釈での授業だったり、上で述べたような媒体による情報だったり、外部からの影響が強いと思われます。そのような偏見は中国でもあって、中国で放送されるテレビドラマでは、日中間にあった歴史的な戦争などを取り扱った作品が日常的に放送されていて、その中で日本人は、「日本小鬼子」、いわゆる典型的な悪者として描かれていました。それを見て育った私も10歳で日本に来た頃の頃は、日本人のこと

をあまりよく思っていなかったのを覚えています。しかし当時ひらがなもできなかった私が入った一般の公立小学校では、先生方も同級生もみんなに助けられ、半年ほどで支障なく学校生活を過ごせるようになったという経験で、それまで持っていた日本に対する負のイメージは完全になくなり、この国での生活が好きになりました。一方で日本で10年ほど生活してきたかなり日本での生活に慣れてきた今、久しぶりに中国を訪れて感じるのは、買い物で少しおまけをしてくれるなどの街の人の温かさだったり、みんなて同じ大皿料理を食べる親しみやすい自由な文化など、実際に行ってみないと分からないような素敵な部分を改めて感じられました。

もちろん過去を遡って行けば、歴史上において両国は互いに傷つき傷つけられた出来事が数々あるが、あくまでそれらを乗り越えての現代を生きる我々は、いつまでも過去のことを引きずって先入観を持ったまま交流するべきではないと考えます。過去の出来事や間接的な情報のみで判断するのではなく、実際に訪れて現地の人々と直接交流することで、人々の中にある先入観をなくし、そうやって時間を重ねていくことで本当の意味での両国の親交が可能になると、今回の訪中団を通して強く感じました。

「ステレオタイプの中国像と日中のこれから」 川田青星

研修当初私の心中は穏やかではありませんでした。中国は悠久の歴史と雄大な自然を誇る一方で、淀んだ都市部の空気と冷たい人柄という負のイメージも抱いていたため、不安で胸がいっぱいだったのです。姉から本当の中国像については聞いていたものの、自分の目で見たことがないということもあり SNS 等で目にするステレオタイプの中国像というものが私の中に残っていました。本当に5日間も中国で暮らせるのだろうか。そんな私の不安はすぐに消え去りました。事実上の活動初日となった研修2日目、3号車に添乗した王さんや北京城市学院の学生たちの熱烈な歓迎を受け、安心感を与えられたのです。北京の街並みについて説明する王さん、文化体験で戸惑っている私たち日本の学生に丁寧に教えてくれた北京城市学院の学生。その日の最高気温は摂氏1桁だったと記憶していますが、彼らの優しさに触れた私の心は温かさで満たされました。こんなにも優しい人たちだったのかと、私は勝手に冷たい人たちはばかりだと思い込んでいたことを恥に思いました。また、車窓を流れる北京の風景は淀んでいるとは言い難く、とても活気に溢れていました。私が抱いていた紋切り型の中国像は良い意味で瞬間に崩れました。「百聞は一見に如かず」ということわざがあるように、やはり自分の目で確かめなければ本当の姿は分からないものです。SNSが発達し多くの情報に触れることができる現代だからこそ、他人の意見を鵜呑みにせず自分の頭で考え、そして体験することが重要なのではないかと思います。

滞在中何度も耳にした言葉があります。「日本と中国は一衣帯水である」という言葉です。日本と中国の間には海がありますが、両国の関係は切っても切り離せないものです。その証拠に昔から日中間では盛んに交流が行われてきました。あるときは日本が中国の文化を学び、またあるときは中国が日本の技術を学ぶというように、互いに尊敬し交流することで両国は発展を遂げてきました。これからも隣人として敬意を持って接し、相互扶助的関係を続けていくべきだと思います。そのために必要なのは民間レベルでの交流を継続していくということです。政府間関係は情勢によって変化する可能性があります、個々人の繋がりや情勢に関係なく継続していくことができます。日中友好協会や中国日本友好協会のような組織はそうした民間レベルでの交流のきっかけになると思います。実際今回私たちは日中友好協会分団として中国に派遣されましたが、周りの人に聞いてみると、今回のプログラムがきっかけで中国に行こうと思ったという声や、行こうとはしていたけれどいきなり一人で行くのは抵抗があったという声を聞きました。私も同じく今回のプログラムがなければ中国へ行っていなかったかもしれません。日中友好協会のような民間団体を通して交流のきっかけを作り、そこで得たつながりを継続する。これが日中交流の一つのモデルのように思えます。今回訪中のきっかけをいただいた恩に報いるためにも、私はこれから今回のような日中交流のきっかけづくりを手伝っていきたく考えています。

ステレオタイプの中国像を壊され、中国の文化に触れ、そして今後の自分の歩み方を考えるきっかけにもなったこの5日間は一生忘れることがない思い出になると思います。私たちを温かく迎えてくださった北京城市学院をはじめとする中国の皆さん、このような機会を提供してくださった日中友好協会の方々、この度は貴重な体験をありがとうございました。

「訪中団感想文」 小松原 隆

今回、訪中団への参加を志望した理由は、実際に自分の目で中国の現状を知り日中関係について実体験に基づいた自分の意見を持ちたいと考えたからである。というのも、私の家族の多く、祖父母を中心として、中国に対して否定的な意見を持っており、そのような環境で育ってきたせいもあり、私自身も偏見を持つことは良くないことであると感じてはいたものの心のどこかでは否定的な意見を持っていた。警察予備隊に従事していた祖父にとっては当時の日中関係の印象がとても強く、今でもかなり否定的(ヘイト的な)考えを持っており、日常的に当時の祖父の経験や中国に対する意見を聞いて私は育ってきた。しかし、私は大学2・3年次の交換留学中に沢山の中国人学生に出会い、交流していく中で自分が何の根拠もなく中国人に対して否定的な意見

を持っていてことを恥ずかしく感じた。なぜなら私が交流した中国人学生は日本文化、特にアニメやゲームなどのサブカルチャーに興味を持っており、私に屈託のない笑顔で好奇心旺盛に様々な質問をしてくる姿はとても印象的で好感の持てるものであり戸惑いすら覚えるほどであった。私はとりわけ仲良くなった学生の何人かに恐る恐る日本や歴史的な日中関係についての質問を試みたのだが、歴史的認識については確かに日本の義務教育で一般的に教えられる内容とは異なる点があったものの、彼らにとっては大事な歴史であるけれど今を生きているのは彼ら自身でありその感情を現代における国際関係に持ち込むのは間違っていると主張していた。私はその考えを聞いて今までの自分の考えの至らなさ、浅はかさを体感したとともに、自分の目でも確かめる必要があると感じたのである。

上記の理由で今回訪中への参加を志望したのだが、この自分の目で現状を知りたいと考えていた私にとってはまたとない機会であったとともに、実際に参加してみたことで気づくことができたことが沢山あった。第一に感じたのはやはり半日感情についてである。大多数の日本人が考えるほど中国人は半日感情を持っていないように感じた。実際に私たちが交流したのはどちらかと言えば親日的な人々ではあると思うが、ショッピングセンターで買い物をしたり街に繰り出してみたりした時に日本語で客寄せをし、気さくに話しかけてくる人もいたことから、訪中前に多少覚悟していたような嫌な思いをすることはなかった。むしろヨーロッパに留学していた時の方がよほど嫌な思いをしたくらいである。期間の長さは違うもののヨーロッパでは人種差別に近い扱いを受けたりすることは珍しいことではなく、むしろ中国の方が居心地は良いのではないかと感じたほどである。これらのことから、大多数の日本人が持つ中国へのイメージはかなり偏ったものであることを自分の目で確かめることができた。また、同時に日本人が偏ったイメージを持つのはなぜかと考えたときにやはり大きな要因としてメディアの偏った報道や情報のキトリが存在するように感じた。中国で発生した公害や凶悪な事件・デモに関しては大々的に報道するが一方でめでたく祝福されるべき出来事がニュースで報道されているのはあまり目にした覚えがない。確かに自国のことではないのでいちいち報道する必要はないと思うが、何より大切なのは日常に溢れている情報を鵜呑みにするのではなく自分の経験をもとに正しく判断するリテラシーであると再確認することができたと同時に、何も知らずに勝手に決めつけそれがヘイトにつながってしまう可能性があると思うと未恐ろしくも感じた。とりわけ日中関係に関しては、日本人の中国に対するイメージは決して良いものではないが、一人ひとりがその感情・イメージの出处についてわかっているわけではないだろう。今一度、日中関係についてはもちろんのこと、その他この世に溢れている様々な事象に関する自分の認識が果たして正しいものであるのか考え直してみる必要性があるのではないだろうか。

「訪中を終えて考えたこと」 坂本亜莉朱

私は大学で中国語を2年10か月ほど勉強していますが、この日中友好代表団として訪中するまで中国に行ったことはありませんでした。多くの周りの友人は中国での観光などを楽しんでいましたが、私はなかなかその機会がなく、中国は憧れの国でした。そして2019年の個人的な目標として中国か台湾に旅行するというのがありました。思いがけないところで訪中の機会を頂くことになり目標を達成することができました。私は普段、中国語を勉強するだけでなく、中国の政治や文化について学んでいます。中国に対して興味関心を持った上で訪中できたことはまたとない機会でした。中国や台湾などの留学生ともよく話しており、彼らはとても優しく、とても優秀で私たち日本人学生に友好的です。よく中国語の勉強を手伝ってくれたり、個人的に遊んだりして私たち日本人とも変わらないところもあります。

実際に中国・北京に滞在した5日間では充実した体験でした。2日目には中国城市学院のキャンパス見学や中国の伝統の切り絵を体験しました。最初は切り絵をやることになったときは残念に思っていたのですが、思いの外切り絵に夢中になってしまいました。中国の伝統の切り絵では一つ一つ文字に意味が込められており、中国の人たちは縁起ものを重視していることが感じられました。その後、天安門広場と故宮博物館に行きました。そこでは観光に来た人は多かったはずですが、広場がとても広かったせいか、そこにいた観光客が少なく感じました。天安門広場の中に入るときの門には金色の粒のようなものが無数に張り付いており、それに触ると幸せになれるとのことでした。故宮博物館では中国の王や皇后がつけたアクセサリーや置物などが展示されていました。金を使ったものが多く展示されており、昔も今も中国人は光り物に目が無いのだと感じました。そして最も印象深かったのは万里の長城でした。大学の先生から話には聞いていましたが、万里の長城は思ったよりも大きくて高かったです。なんとか頂点に辿り着くことができたのですが、降るときには歩くスピードが遅かったせいか最終的には班の人たちに置いて行かれてしまいました。一人、自分を励ましながらかんとか待ち合わせ時間内に降りることができてホッとしたのを思い出します。万里の長城は元々敵が侵入できないように作られたもので、敵の侵入を防ぐためとはいえ、これを完成させた昔の人たちには感嘆を覚えました。

この中国に滞在した5日間では、自分の人生観や知見が広がりました。政治的に良くないイメージを持っていたけれども、訪中して思ったよりも良いところがあると気付くことができました。中国に対して「怖い」や「一人で旅行しづらい」などのイメージがありました。しかし、中国の人たちは明るく暖かい人が多く、中国や中国人の全部が悪いわけではないのだと感じます。今回はメジャーな観光名所を周ることができたため、次回中国に行く機会があれば、上海などに行ってより深い中国を感じたいです。そのように感じる事ができたこの訪中の機会を下さった日中友好協会の方々や大学の先生方に感謝します。

1. 訪中前

私は20歳を過ぎるまで、海外について関心を持つことが出来ずにいました。中高生及び大学1年生の頃までは必須科目として英語を勉強したり、国際情勢についての授業を受講してはいたりしたものの、どこか遠い世界の話のようで、自分の身の回りで起こっているものとして、捉えられない自分がいました。

そのような私が中国に関心を持つようになったきっかけは、大学で所属しているゼミでの経験でした。私は大学3年生から地域社会学のゼミに所属し、そこでは多くの中国人が住む「埼玉県川口市」を舞台に多文化共生について学びました。

ゼミでは、実際に川口市に赴き、ボランティア日本語教室に参加して中国人居住者と関わりを持ちました。その時までには中国に対して、パクリ問題や食品安全性への懐疑から、あまり良いイメージを抱いていませんでした。しかし、中国人との関わりの中で、彼らはすごく勉強熱心で向上心が高く、フレンドリーな人達ばかりだということがわかりました。

また、大学4年生になってからは、ゼミにティーチング・アシスタント(TA)として大学院に通う中国人留学生がやってくるようになりました。彼女は片言の日本語であることを除いては、大学院での勉強に励む傍ら、オシャレやカフェ巡りが趣味で恋バナが大好きな、良い意味で日本の学生と変わりのない「普通の若者」でした。私と彼女はすぐ仲良くなり、2人でよく出かけるようになりました。

その一方で、彼女と深く関わって行く中で日本と中国の文化の違い、そして彼女の周りを取り巻く、日本人が抱える中国人への偏見の強さを知りました。そして、もっと中国について知りたいと思うようになりました。

以上を踏まえ、今回の訪中を通しての目的として「本当の中国を知る」というものを自身の中で掲げました。実際に訪れるからこそわかるような、建築物や街並みなどといったハード面での文化の違いについては勿論のこと、日本人と中国人の考え方、という意味での内面的な文化の違いについても、身をもって体感したいと考えました。

2. 訪中後

2-1. 建造物から見る中国文化

実際に中国を訪れてみてまず感じたのは、そのスケールの大きさです。移動中のバスの中から見るビル群の大きさや高さ、イルミネーションの煌びやかさから、中国の経済発展の著しさを感じました。

一方で、天安門広場や万里の長城をはじめとする歴史的建造物からも、「中国」という国の歴史の大きさを感じました。どちらもメディアでしか見たことがありませんでしたが、実際に目の前にしてみると想像の何十倍も大きく驚きました。特に、万里の長城は圧巻でした。頂上にはたどり着けませんが、必死に自分の行けるところまで登り、見下ろした景色は本当に美しく、あの景色は一生忘れないと思いました。そして、2000年以上前の人々が生み出した建造物の上に自分が立っているのだと思うと、先人達に尊敬の念を抱くとともに、「自分も彼らのように、何かをこの世に残せるような人間にならねば」と奮い立たされる気持ちにもなりました。

また、故宮博物院や天壇広場では、中国文化独自の煌びやかさや派手な装飾が印象に残っています。日本古来の世界観としては質素で静かなものを基調とする「わびさび」が有名ですが、中国では朱色・金色を基調とした建造物や調度品が数多く置かれており、とても対照的だと思いました。

2-2. 人との関わりから見る中国文化

中国の人々と関わる中で感じたのは、彼らは好きなものや自分の目指すものに全力投球だ、ということです。歓迎会で知り合った中国人大学生は日本のアニメが好きで日本語を勉強するようになったと話してくれました。また、歓迎会で中国人大学生達が披露してくれた出し物はとてもクオリティが高く、素晴らしいものでした。また、ベンチャー企業にコワーキングスペースを提供する「Ucommune(優客工場)」の社員さんは自身の行っている仕事に誇りをもち、自身をもって自分の会社についてはなしていた様子がとても印象的でした。

一方で、あまり気分の良くない出来事もありました。

北京空港で入国審査の際、自分の後ろに並んでいた人達が別の列に案内され、自分よりずっと先に入国審査を終えていたこと。案内万里の長城にあるトイレに並んでいた際、平然と列に割り込みが起きたこと。夜の自由時間にタクシーを使ってホテルに戻ろうとした際、「代わりにタクシーを呼ぶ」と言って繁華街の現地人が通常の5倍以上の値段を提示してきたことなどです。ずっと日本で暮らしてきた自分にとっては、これらの行為はマナー違反だと思いました。しかし、中国人にとってこれらのことは「普通」のことであるのかもしれませんが。現在は経済成長が著しいものの、かつての中国は発展途上で人口も多かったことから「奪い合う」意識が国民の中に根付いている、ということを知りました。前述の出来事は日本人と中国人の根本的な考え方の違いが現れたものかもしれない、とも思えるようになりました。

3. まとめ

上記の訪中での経験を踏まえて、私が感じた中国人と関わる上で重要なことは、「異文化を認め、歩み寄り」ということです。自分の育った環境、価値観だけで物事を判断するのではなく、相手のもつバックグラウンドを知ろうとし、それを認めて歩み寄る姿勢が重要だと思いました。

また、彼らに歩み寄り上で自身に足りないものは、語学や歴史に対する「知識」だと今回の訪中で強く感じました。今回の訪中を共にした日本人大学生たちは「語学力を試したい」という目的や「歴史を学んでいて興味がわいた」という動機から訪中を決意した人々ばかりでした。彼らが中国人と関わる様子や、歴史的建造物に対する知識の深さを目の当たりにして、自分の無知を取りました。訪中後は中国史や中国語について勉強しようと思いました。

今回の訪中は、学生生活最後の自身にとって、とても意義のあるものとなりました。今後の社会人生活でも今回学んだことを生かして、日々を過ごしていきたいと思えます。

「初めての中国」 鈴木 千遥

私は今回初めての中国訪問だったため、ずっと驚きと感動の連続でした。今回は私が目にした中国について、同じ日本人大学生たちとの日々交流について述べます。

まずは、私が目にした中国について、研修の内容に沿って振り返り、考えたことについてです。

最初に、2日目の学校交流についてです。学校交流で私は切り絵体験のグループでした。学生との交流がほとんどなかったのは寂しかったですが、中国語の説明を聞き取ることや、集中して伝統的な切り絵をすることができ、良かったです。切り絵の種類に関する説明では、ある切り絵はめでたい中でも結婚などに多く用いられるなどの説明を聞いたのが面白く、勉強になりました。

故宮は、私にとって憧れの場所でした。なので、実際に目にするだけでかなり興奮しました。写真では分からなかった中国らしい圧倒的なスケールや、きらびやかで重い物を好む中国の考え方を感ずることができ、忘れられない経験になりました。

歓迎会は、中国側の学生たちの発表がどれもクオリティーが高いことに驚きました。また発表の内容も、アニメ文化を尊重してくれた内容や、中国文化を表したものなど幅広くとても面白かったです。美しく華やかで、凛とした中国を見ることができたと思います。

3日目の万里の長城は、故宮同様中国を勉強する上では欠かせず、憧れの対象の一つだったため興奮しました。下からの景色も圧巻でしたが、上からの景色はうっすらと霧がかかっている、とても神秘的で壮大でした。登っていく中で、階段一段一段の高さが全く違っていたり、ガタガタしていたことから昔から存在していたということを感じられて嬉しく、感慨深いものがありました。

天壇公園では、中国の高齢者の方が多く集まりカードゲーム等をしていて、日常的な中国を見られたようでとても嬉しかったです。ここまでに見たどの建物も細部まで綺麗に装飾されていて美しかったです。天壇公園もそれは同じで、どの通路にも美しい模様があり見ている飽きませんでした。

その後のショッピングでは、店員さんの質問を聞き取り答えることができたり、値引き交渉を初めてすることができたのがとても嬉しかったです。値引きはもう少し強気にいくべきだったと後悔はありますが、中国について勉強するためのいいモチベーションになりました。

起業訪問については、中国側がこの企業を見せる理由はなんだろうと考えました。企業の方向性が国と共通していたり、中国の中でも最先端な企業であるためかと予想しましたが、よく分かりませんでした。ただ、企業自体は使われていなかった場所を有効活用していたり、参考にしたいと思いました。

北京の街並みについては、建物の個性が全部違って見えて飽きませんでした。コンクリートが丸出しのものもあれば、ヨーロッパ風であったり、アメリカ風の建物が多くあった印象です。道路はジグザグしていて乱立していて、何についても全体的に統一感がないと感じました。また工事中のものも多くあり、工事現場は日本みたいに隠されてなくて規模も大きいことに驚きました。

そう言った統一感が全くなかったり、空いているスペースや工事中のものが多くあったことから、これからどこまで発展していくんだろうと想像し恐ろしくなりました。

千人交流大会では、中国側のクオリティが高すぎたことが忘れられません。学生代表の挨拶は特に印象に残っていて、完璧に完成されたスピーチに対してさすが中国という印象でした。

日々交流については、最初は自分の大学よりも遥か上のレベルの大学の人が多く緊張していました。実際に関わってみると、やはり経済などの知識では差が出てしまうものの、人としての差はあまり感じず安心しました。むしろ、どの人もとてもフレンドリーで驚きました。全く関わりがなかったとしても、感動をその一時だけでも共有できたりして交流できたことはとても嬉しかったです。おかげで、誰といても面白いという環境の中、安心して中国を見ることに集中できたと思います。

以上が「初めての中国」についてです。このような貴重な経験をする機会をいただき、本当にありがとうございました。

「中国留学に活かすために」 丹羽珠実

訪中団を終えて今回この12月の訪中団に参加してよかったと思いました。なぜなら私は2020年の2月から中国・広州へ約10ヶ月間の留学が決まっていたからです。私はこの訪中団に参加しなかったら中国に行くことなく留学が訪中初になるところでした。行ったことのない国に一人行くのも良い経験となるとは思いますがやはり不安や心配のほうが多いと思います。先にこれから留学に行く国を訪れることで現地ではどのような生活をしているのか、自分の実際の語学力の確認、現地の学生の雰囲気を知ることが出来ました。現地ではどのような生活をしているのかはまだ詳しくはわかりませんが通勤ラッシュ、帰宅ラッシュの凄さや家庭料理を実際に体験することができ、都会は日本とあまり変わらずラッシュがあり、家庭料理はさまざまな味付けがあるなど思いました。一番驚いたのは朝の早さです。日本ではスーパーや観光地は9時くらいに開店しますが中国では8時くらいにはもう開店していて日本よりとても早いと思いました。自分の語学力は値引き交渉するときや学校訪問したときに学長の話聞いていて中国語だけだと何を話しているのかほとんど理解できず勉強不足さを実感しました。このままでは留学に行っても言葉を理解出来ず生活出来ないと思い、さらに勉強に励むきっかけになりました。学生の雰囲気は日本人と違って人見知りせず、日本語が話せなくても教えようという気持ちの方が強く言葉が通じなくても怖じづかない姿勢が素晴らしいと思いました。歓迎会で同じテーブルになった学生はまだ日本語を勉強し始めて5ヶ月しかたっていないのに私たちの質問に一生懸命に答えてくれました。その姿をみて、話せるということが重要ではなく伝えようという気持ちの方が大切だと思いました。さらに二日目の歓迎会や千人交流大会での学生のパフォーマンスを見てとても日本の文化を愛してくれているし、自国の文化を大切にしているなど思いました。私は日本の文化をもっと愛し、知り、身につけなければいけないと思いました。千人交流大会で中国の学生のスピーチを聞いて一つのことに打ち込む姿を私も見習わなければと思いました。企業見学に行き、シェアオフィスの中にはたくさんの本や睡眠するための場所があり、働く人のことを思いやる作りでさすが最先端に行く国だと実感しました。

私は訪中する前まで中国人は冷たく、ルールをあまり守らなそうなどマイナスのイメージばかり持っていました。しかし今回の訪中で私の持っているイメージとは正反対で私は中国に対して偏見を持っていたのだと気づかされました。これからは中国人だからと偏見せず、たくさん中国人と友達になりたいと思います。私の母は30年前に中国に旅行に行きトイレが汚いなどマイナスのイメージしか持っていません。しかし、現在の中国はとても発展していてとても汚いことなどありません。私は母に全然汚くないしきれいだよと伝えました。私の親のように中国に対してマイナスイメージを持っている人は日本にたくさんいると思います。私は自分が体験した現在の中国の状況を人々に伝えることで偏見を少しずつ減らそうと思います。この訪中団は私と中国を繋ぐ初めての訪中で普段なら出来ないことがたくさん体験でき、今後私と中国の距離を縮めるとても良いきっかけになりました。

「日本と中国の架け橋に」 平方瑞希

今回、訪中団に参加できたことはわたしにとって大変貴重な経験となりました。また、たくさん素晴らしい友人、思い出をつくることができ、とても充実した中国訪問でした。わたしは大学で中国文学を専攻し、ほんのすこしではありますが中国について学んできました。今回この訪中団に参加できたのも、わたしのゼミを担当してくださっている教授からこのお話をいただけたことがきっかけでした。さまざまな縁が重なり、こうした素敵な機会に巡り合えたことをとても嬉しく思います。

中国文学専攻のゼミということもあり、これまでわたしは大学生活のなかで何人かの中国人留学生と接する機会がありました。彼らの何事にも意欲的に取り組む姿勢がわたしにとって印象的でした。そういった様子は、彼らが留学に来るくらいの人物であるからということも理由にあるとは思いますが、わたしはそのなかのひとりから「中国の学生(大学生に限らない)は授業外の時間でも自習室などに行き、朝早くから夜遅くまで勉強する」という話を聞き、とても感心したことがあります。わたしのこれまでを振り返ると、高校受験、大学受験となんとなく決められた当たり前の道を歩んできた、という感覚で、それほど熱心に勉強に取り組んできたとは言えません。もちろん皆が皆そういうわけではないけれど、わたしと同じように、ただなんとなく大学まで来たというよ

うな人がまわりにも見られ、日本人の学生は学ぶことに対してそこまで貪欲でないと感じられます。そのため、わたしは以前からそうした熱心な中国人に尊敬の気持ちがありました。

今回の訪中では、時間の都合もあり、思っていたより中国人ひとりひとりとの深い交流はできませんでしたが、食事のとき同席してくれた中国の大学生、ガイドをしてくれた方々、そのほか行く先々で出会った人たちなど、皆とても素晴らしく、わたしの中国人たちに対する思いは変わりませんでした。大学生千人交流大会での中国人代表学生のはきはきとしてスピーチにも感動を覚えました。実際に中国を訪れて、たくさんの中国の人々を見て、中国の人たちは自分の意思を持ち、将来に向かって力強く生きているという印象を受けました。中国の成長はこうした中国人の熱心な姿勢と積極的な国民性に裏打ちされているのだと感じました。

わたしはこの訪中以前から中国の人が好きでしたが、テレビで見かける大気汚染や政治の話題、ばくりの問題など、それまでに中国に少なからず良くないイメージがあったというのもまた事実です。特にわたしの両親は年代や出身などの問題から、中国に対する印象があまり良くありません。それでもわたしが大学で中国について学んでいこうと思えたのは、異文化理解を学び、偏見なく外国を受け入れようとする姿勢が持てたり、実際に中国人と関わることができたりしたからです。今回中国を訪れてみて、中国はわたしたち学生をあたたく迎え入れてくれたし、またどこに行っても中国の人たちは日本人であるわたしたちにとっても親切に接してくれました。日中の青年交流、そしてこの訪中団に参加したわたしたちの役割は、これまでの慣例的な中国に対する世間の悪いイメージを払拭し、こうした「良い中国」を広めていくことにあるのではないかと思います。わたしの両親を見ていると、自分たちの上の世代の人たちの意識を変えていくのは難しいことのように思います。だからまずは自分たちから、そしてその思いを下の世代にもつなげていき、すこしでも良い中国という印象を広げていきたいと感じました。この訪中団でおわりではなく、これからも中国の魅力を伝える活動など、日中の友好関係になんらかの形で尽力していきたいです。

「大学生訪中団を経験して」 松本直樹

私は、今回の大学生訪中団で初めて中国を訪れることになった。中国という国について知っていることといえば、遣隋使・遣唐使など4000年にも渡る歴史を背景にして独自の文化が発展してきたということである。また、近年はIT技術の発達に伴って深圳や上海を中心に日本よりもIT産業が進んでいる国という印象があった。大学での第二外国語は、中国語を専攻していたが、中国に対する知識はほとんど無かった。しかし、この訪中で天安門広場や故宮博物館などの歴史ある場所を訪れたことで自分の中で少しでも中国や中国語に対する興味を深められたので、とても価値のある体験でした。

4泊5日の日程の中で、数多く貴重な体験をすることができました。中国国際航空では、数多くの観光客・監視カメラ・警察官など中国に来たなと心から実感した。そして、天安門広場では大きな衝撃を受けた。教科書で見ていた景色が今自分の目の前に広がっているという体験をしたことは今後の人生に少なからず影響を与えていくであろうと感じた。そして、歓迎会では中国人大学生の隣に座った。英語を介して多くのコミュニケーションを図ろうと努めた。そして感じたことは「日本文化の素晴らしさ」である。その学生はアニメや日本文学を専攻しており、共通の話題を通じて相手と良いコミュニケーションを図ることが可能になった。1つの話題を通じて異国の大学生と交流できる面白さを体感した。

そして、やはり今回の訪中で印象に残っていることは中国の技術発展のスピードやスケールの大きさである。バスで移動する際にとっても印象に残った光景がある。それは、銀行の多さや建物の規模・ユニーク性である。中国経済が凄まじいスピードで発展しているからこそ経済において中国銀行を始めとした銀行の数が多くなっているのではないかと考えた。また、北京を中心に幾多の高層ビル群が林立していた。しかし、その近隣や郊外に目を向けると貧困世帯が多く住んでいるような印象があった。中国は、戸籍制度が深く関係している国であると教わった。受験戦争も日本より遥かに厳しい。必死に勉強することで現状の環境を変えてやるという反骨心の強さを感じた。5日間で得た経験から自分もこの精神力を見習って、自分の人生は自分次第という気持ちを持って今後を歩んでいきたいと思わされるようになった。

最後に、今回の訪中を経て感じたのは、自分の目で見る重要性である。何事においても、自分で体験することや積極的に行動することは大切であると思った。距離は近いが詳しくは分からない国である中国を深く知ることができたのはとても良い体験をできました。また、現地の大学生との交流はもちろんだが、班の中でもとても楽しい時間を過ごすことができた。今、その時を最高に楽しむことの価値はとても大切だと訪中を通じて学びました。今後、様々な意見や価値観を持った多くの人々と関わる際には、今回の経験が生きてくると考えます。今回、このような機会を与えて頂きありがとうございました。そして、班の全員と楽しい時間を過ごせました。本当にありがとうございました。

「中国へ訪問して変わったこと」 馬目美奈

今回、中国の北京へ訪問させていただき私自身変わったことがあった。以前、大学のプログラムで2週間天津に語学留学へ行った。その留学の最中に2泊3日の北京旅行をしたため今回の北京訪問は2回目であった。しかし、現地の方との交流や同じ班の日本人との交流はとても新鮮であり、また刺激的なものであった。

日本の代表として、他国に訪問するというをしたことがなかったため日本を背負っていると考えると意識が高くなった。日本青少年代表団歓迎会も開いていただいたり、人民大会堂で行われた友好交流大会に参加させていただいたり実際に旅行ではできないことをたくさん経験させていただいたと心から感じている。中国の学生も日本の学生も台へ上がり歌や自分の国の伝統の踊りを披露したり、相手の国の文化に触れていたりするのに感激を受けた。私自身、人に自慢することが出来る趣味や特技が全くないため、まず悔しかったのと個人として情けなく感じてしまった。毎回の会などの集まりの際にあった日本人に対しての歓迎のスピーチも中国語で聞き取ることはできなかったが日本と中国は本当に友好関係が成り立っていると感じられるようなものばかりであったため感激を受けた。

今回、現地の学生との交流はあまりないと感じたがお土産を買うときに中国人と少しだけ会話をする事が出来た。お互いの共通言語は英語ということで飛行機のなかでもお店の中でも英語で話しかけられることが多かったが私自身、大学で中国語を学んでいるため未熟な中国語であったが積極的に話しように心がけていた。やはり現地の方の話すスピードについていけずまだまだ勉強が足りないと感じた。しかし、以前、天津へ語学留学に行ったときは你好などの簡単な中国語でしか会話することが出来なかったが今回はお店の人に対してこれを少し安くしてもらえないか、これを4つ買うから少し安くしてと値切ることが出来たのが嬉しかった。

日本人の同じグループの学生と交流して感じたのは意識が私に比べ高い人が多いということ。私はこの訪中団に入れていただき日本の代表として中国に訪問するというのが友人に対して自慢ではあったが、いつも食事を一緒に食べるメンバーの中に前に中国へ訪問したのは日本の内閣政府から選ばれたメンバーの一人で2週間だったと聞いた時には私自身意識もその方に比べ低いためまだまだ沢山のことにチャレンジしないといけないと考えた。また、私は中国語を学んで2年になるがまだまだあまり話せていない。しかし、2年でペラペラに中国語を話せるようになったという学生もいたためもっと頑張らないといけない、中国語を学んでいるということだけではいけないと感じた。帰国してまず考えたのは、日本人に対しても他の国の方に自慢できるような他の人にできないような自分にしかできない特技を見つけたいということ、中国語をもっと勉強し将来日本と中国をつなぐ架け橋のような存在になりたいということであった。